

九州大学工学部 正員 山崎 俊止

九州大学工学部 正員 〇 柳 木 武

1. 緒言 一方向連続矩形板の解法に関する既往の研究は、相対する2辺が単純支持される場合の成図式⁽¹⁾、図元式等の研究があるが、相対する2辺が全く任意の一方向連続矩形板の解法を取り扱った論文は未だ見当たらない。本論文は着者等の連続板の解法に関する一連の研究のオーストリア、先に発表した二方向連続矩形板⁽²⁾および一方向連続扇形板⁽³⁾の解法に基づき、任意境界条件で任意重直荷重が作用する一方向連続等方性等断面矩形板の厳密解法を、一初辺が自由な一方向連続板を主題として提示するものである。

2. 片わかれ角-端元-メント関係式の誘導 任意重直荷重 $p(x, y)$ が作用する等方性等断面平面板の基礎微分方程式 $\nabla^4 w = \frac{p(x, y)}{D}$ を満足する片わかれ角-一般解は次式で与えられる⁽⁴⁾。

$$w = \sum_{n=1}^{\infty} \{ (A_n^x + B_n^x y) \cdot \sinh \frac{n\pi}{a} y + (C_n^x + D_n^x y) \cdot \cosh \frac{n\pi}{a} y \} \cdot \sin \frac{n\pi}{a} x \\ + \sum_{n=1}^{\infty} \{ (A_n^y + B_n^y x) \cdot \sinh \frac{n\pi}{b} x + (C_n^y + D_n^y x) \cdot \cosh \frac{n\pi}{b} x \} \cdot \sin \frac{n\pi}{b} y + \sum_{m,n=1}^{\infty} \frac{R_{mn}}{D \pi^2 (a^2 + b^2)^2} \cdot \sin \frac{m\pi}{a} x \cdot \sin \frac{n\pi}{b} y \quad (1)$$

ただし、 $A_n^x \sim D_n^x$, $A_n^y \sim D_n^y$ は境界条件より定まる積分定数、 $a, b = x, y$ 方向のスパン

$D =$ 板剛度、 $R_{mn} =$ 任意重直荷重 $p(x, y)$ の二重正弦フーリエ級数展開式における展開係数

さて、一方向連続矩形板において、相対する2辺の境界条件は図-1(a)~(f)に示すごとく6通りで、

任意の境界条件をもつ一方向連続板を解くためのには、(a)~(f)の各基本系に対する片わかれ角-端元-メント関係式をそれぞれ求める必要がある。図-1の

基本系(a), (b), (c)に図-2に示すごとく矩形板に関する片わかれ角-端元-メント関係式を求めれば、 $\theta_{xm} = \theta_{ym} = 0$ で基本系(a)、 $\theta_{ym} = M_{xm} = 0$ で基本系(b)、 $M_{xm} = M_{ym} = 0$ で基本系(c)の片わかれ角-端元-メント関係式がそれぞれ求まる。また基本系(d), (e)に

図-2に示すごとく矩形板が対応し、その片わかれ角-端元-メント関係式を求めれば、 $\theta_{ym} = 0$ で基本系(d)、 $M_{xm} = 0$ で基本系(e)の片わかれ角-端元-メント関係式が求まる。基本系(f)に図-2に

示すごとく矩形板が対応し、その片わかれ角-端元-メント関係式が求まる。結局図-2~4に示す種類の矩形板を解くことにより、図-1に示す6通りの基本系について、その片わかれ角-端元-メント関係式を全て求めることができる。このうち、図-2

に示す矩形板は、相対する2辺が自由で、他の2辺が単純支持であり、任意重直荷重 $p(x, y)$ により、それぞれ単純支持辺で端元-メント M_a, M_b が作用し、さらに支反 S_a, S_b を受けるものとすれば、その境界条件は次の通りである。

図-1に示す矩形板は、相対する2辺が自由で、他の2辺が単純支持であり、任意重直荷重 $p(x, y)$ により、それぞれ単純支持辺で端元-メント M_a, M_b が作用し、さらに支反 S_a, S_b を受けるものとすれば、その境界条件は次の通りである。

図-1に示す矩形板は、相対する2辺が自由で、他の2辺が単純支持であり、任意重直荷重 $p(x, y)$ により、それぞれ単純支持辺で端元-メント M_a, M_b が作用し、さらに支反 S_a, S_b を受けるものとすれば、その境界条件は次の通りである。

図-1に示す矩形板は、相対する2辺が自由で、他の2辺が単純支持であり、任意重直荷重 $p(x, y)$ により、それぞれ単純支持辺で端元-メント M_a, M_b が作用し、さらに支反 S_a, S_b を受けるものとすれば、その境界条件は次の通りである。

図-1に示す矩形板は、相対する2辺が自由で、他の2辺が単純支持であり、任意重直荷重 $p(x, y)$ により、それぞれ単純支持辺で端元-メント M_a, M_b が作用し、さらに支反 S_a, S_b を受けるものとすれば、その境界条件は次の通りである。

図-1に示す矩形板は、相対する2辺が自由で、他の2辺が単純支持であり、任意重直荷重 $p(x, y)$ により、それぞれ単純支持辺で端元-メント M_a, M_b が作用し、さらに支反 S_a, S_b を受けるものとすれば、その境界条件は次の通りである。

図-1に示す矩形板は、相対する2辺が自由で、他の2辺が単純支持であり、任意重直荷重 $p(x, y)$ により、それぞれ単純支持辺で端元-メント M_a, M_b が作用し、さらに支反 S_a, S_b を受けるものとすれば、その境界条件は次の通りである。

図-1に示す矩形板は、相対する2辺が自由で、他の2辺が単純支持であり、任意重直荷重 $p(x, y)$ により、それぞれ単純支持辺で端元-メント M_a, M_b が作用し、さらに支反 S_a, S_b を受けるものとすれば、その境界条件は次の通りである。

図-1に示す矩形板は、相対する2辺が自由で、他の2辺が単純支持であり、任意重直荷重 $p(x, y)$ により、それぞれ単純支持辺で端元-メント M_a, M_b が作用し、さらに支反 S_a, S_b を受けるものとすれば、その境界条件は次の通りである。

図-1に示す矩形板は、相対する2辺が自由で、他の2辺が単純支持であり、任意重直荷重 $p(x, y)$ により、それぞれ単純支持辺で端元-メント M_a, M_b が作用し、さらに支反 S_a, S_b を受けるものとすれば、その境界条件は次の通りである。

図-1に示す矩形板は、相対する2辺が自由で、他の2辺が単純支持であり、任意重直荷重 $p(x, y)$ により、それぞれ単純支持辺で端元-メント M_a, M_b が作用し、さらに支反 S_a, S_b を受けるものとすれば、その境界条件は次の通りである。

図-1に示す矩形板は、相対する2辺が自由で、他の2辺が単純支持であり、任意重直荷重 $p(x, y)$ により、それぞれ単純支持辺で端元-メント M_a, M_b が作用し、さらに支反 S_a, S_b を受けるものとすれば、その境界条件は次の通りである。

図-1に示す矩形板は、相対する2辺が自由で、他の2辺が単純支持であり、任意重直荷重 $p(x, y)$ により、それぞれ単純支持辺で端元-メント M_a, M_b が作用し、さらに支反 S_a, S_b を受けるものとすれば、その境界条件は次の通りである。

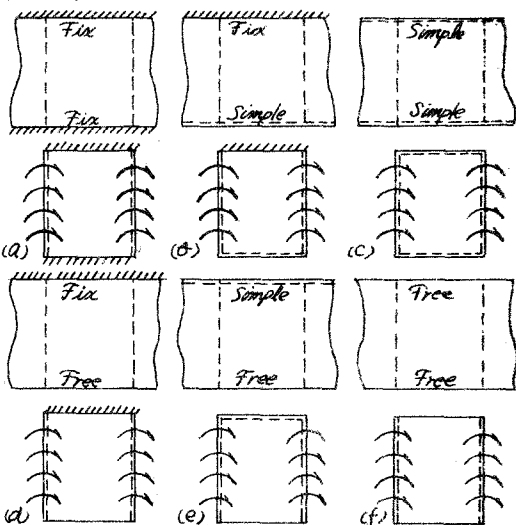
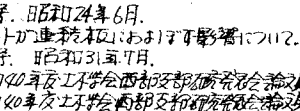
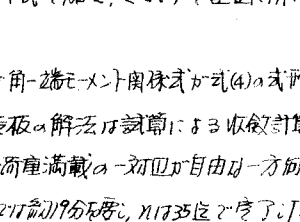
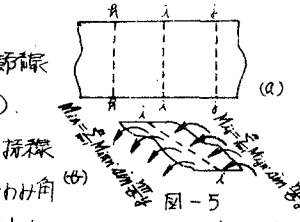
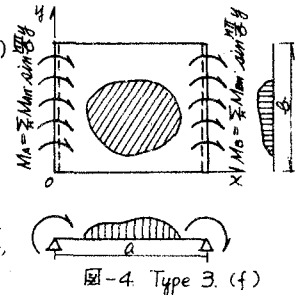
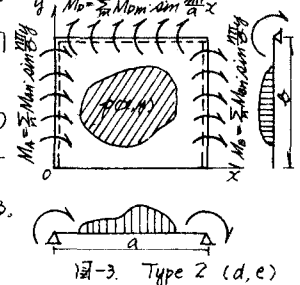
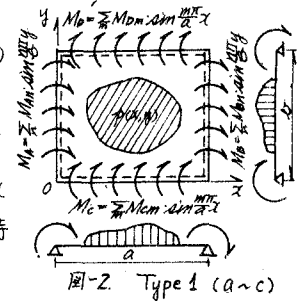


図-1. 一方向連続板の境界条件とその基本系

$$\left. \begin{aligned} x=0, z \quad (w)_{x=0} &= \delta_a = \sum_{n=1}^{\infty} \delta_{an} \sin \frac{n\pi y}{b}, \quad -D \left(\frac{\partial^2 w}{\partial x^2} + \nu \frac{\partial^2 w}{\partial y^2} \right) = M_a = \sum_{n=1}^{\infty} M_{an} \sin \frac{n\pi y}{b} \\ x=a, z \quad (w)_{x=a} &= \delta_b = \sum_{n=1}^{\infty} \delta_{bn} \sin \frac{n\pi y}{b}, \quad -D \left(\frac{\partial^2 w}{\partial x^2} + \nu \frac{\partial^2 w}{\partial y^2} \right) = -M_b = -\sum_{n=1}^{\infty} M_{bn} \sin \frac{n\pi y}{b} \\ y=0, z \quad \text{および} \quad y=b \quad V_y &= 0, \quad M_y = 0 \end{aligned} \right\} \quad (2)$$



式(2)に式(1)を代入してこれらの諸式を連立にして、積分定数 $A_n \sim D_n$, $A_n \sim D_n$ が求められ、式(1)の弾性曲面 w がえられるやうに、これを用いて x に関する第一階微分係数をとり、 $x=0, a$ を代入してそれぞれの単純支持梁におけるたわみ角を算出することができ、他方 $x=0, a$ における x 方向のたわみ角は一般に y のみの函数であるから、これを正弦フーリエ級数展開式で近似すると、前述のたわみ角からえられるたわみ角と同一の関係を成立する。

$$\left(\frac{\partial w}{\partial x} \right)_{x=0} = \sum_{n=1}^{\infty} \theta_{an} \sin \frac{n\pi y}{b}, \quad \left(\frac{\partial w}{\partial x} \right)_{x=a} = \sum_{n=1}^{\infty} \theta_{bn} \sin \frac{n\pi y}{b} \quad \text{----- (3)}$$

式(3)より θ_{an} , θ_{bn} と M_{an} , M_{bn} , δ_{an} , δ_{bn} との関係式、すなわち、図-4に示すごとく矩形板のたわみ角-端モーメント関係式が求まり、次の結果を得る。

$$\left. \begin{aligned} \theta_{an} &= \frac{M_{an}}{D \beta_n} C(\beta_n) + \frac{M_{bn}}{D \beta_n} d(\beta_n) + \frac{1}{D a} \sum_{m=1}^{\infty} \Pi(m, n, s) \cdot D_{ms} \cdot E(\alpha_m, \beta_s) \{ M_{as} + (-1)^m M_{bs} \} \\ &\quad - \beta_n g(\beta_n) \delta_{an} + \beta_n h(\beta_n) \delta_{bn} + \frac{1}{a} \sum_{m=1}^{\infty} (1-\nu) \alpha_m^2 \beta_s^2 \Pi(m, n, s) \cdot D_{ms} \{ \delta_{as} - (-1)^m \delta_{bs} \} \\ &\quad + \sum_{m=1}^{\infty} \alpha_m f_{mn} + \sum_{m=1}^{\infty} \sum_{s=1}^{\infty} \Pi(m, n, s) \cdot \beta_s \cdot E(\alpha_m, \beta_s) \cdot f_{ms} \\ \theta_{bn} &= \frac{M_{bn}}{D \beta_n} d(\beta_n) + \frac{M_{an}}{D \beta_n} C(\beta_n) + \frac{1}{D a} \sum_{m=1}^{\infty} (-1)^m \Pi(m, n, s) \cdot D_{ms} \cdot E(\alpha_m, \beta_s) \{ M_{as} + (-1)^m M_{bs} \} \\ &\quad - \beta_n h(\beta_n) \delta_{an} + \beta_n g(\beta_n) \delta_{bn} + \frac{1}{a} \sum_{m=1}^{\infty} (-1)^m \alpha_m^2 \beta_s^2 \Pi(m, n, s) \cdot D_{ms} \{ \delta_{as} - (-1)^m \delta_{bs} \} \\ &\quad + \sum_{m=1}^{\infty} (-1)^m \alpha_m f_{mn} + \sum_{m=1}^{\infty} \sum_{s=1}^{\infty} (-1)^m \Pi(m, n, s) \cdot \beta_s \cdot E(\alpha_m, \beta_s) \cdot f_{ms} \end{aligned} \right\} \quad (4)$$

ここに、 $C(\beta_n) = \frac{-\gamma_n \sinh \beta_n \cosh \beta_n}{2 \sinh^2 \beta_n}$, $d(\beta_n) = \frac{-\gamma_n \cosh \beta_n + \sinh \beta_n}{2 \sinh^2 \beta_n}$, $E(\alpha_m, \beta_s) = (2-\nu) \alpha_m^2 + \beta_s^2$, $g(\beta_n) = \frac{1}{2 \sinh \beta_n} \{ (1+\nu) \cosh \beta_n + \frac{(1-\nu) \beta_n}{\sinh \beta_n} \}$, $h(\beta_n) = \frac{1}{2 \sinh \beta_n} \{ (1+\nu) \sinh \beta_n + \frac{(1-\nu) \beta_n}{\sinh \beta_n} \}$, $D_{ms} = \frac{2 \alpha_m \beta_n}{(\alpha_m^2 + \beta_n^2)^2}$, $\alpha_m = \frac{m\pi}{a}$, $\beta_n = \frac{n\pi}{b}$, $\Pi(m, n, s) = R_n(\alpha_m) \frac{2 \alpha_m}{\alpha_m^2 + \beta_n^2} D_{ms} E(\alpha_m, \beta_s) \{ (-1)^m + (-1)^s \} \cosh \lambda_m (-1)^s [1]$, $\lambda_m = \frac{m\pi}{a}$, $\gamma_n = \frac{n\pi}{b}$, $R_n(\alpha_m) = \frac{\{ (-1)^m (1-\nu) \lambda_m - (3+\nu) \sinh \lambda_m \}}{\alpha_m^2 \{ (1+\nu) \lambda_m^2 - (3+\nu) \sinh^2 \lambda_m \}}$, $f_{mn} = \frac{1}{D (\alpha_m^2 + \beta_n^2)^2} \int_0^a \int_0^b \phi(x, y) \cdot \sin \alpha_m x \cdot \sin \beta_n y$.

3. 単純板の解法. 図-5(a)に示すごとく、単純板の支持線 $x=1$ を取りおき、節線モーメントの釣り合条件およびたわみ角の連続条件より、次の式を得る。(文献(3)参照).
すなわち、 $M_{1n} + M_{2n} = 0$, $\theta_{1n} = \theta_{2n}$ ----- (5)

単純板上の各中間支持線において式(5)が成立し、その式に相対する2辺の種々の境界条件に対応するたわみ角-端モーメント関係式を代入し、各単純板の単純方向の両端部における支持条件式を加え、それらを連立に解けば所要の一方向単純板の解がえられる。

4. 結果. 相対する2辺が単純支持の矩形板(図-1(参照)以外)は、たわみ角-端モーメント関係式が式(4)の式からわかるごとく、一般に未知数の単純端と級数項の項で表われるので、単純板の解法は試算による収斂計算となるが、計算を利用すれば大に手間が省ける。たとえば一長間に等分布荷重満載の2辺が自由の一方は単純板を、未知数 M_{0n} の収斂試算が 10^{-4} となるまで OKITAC-509 で演算し、結果の M_{0n} を得て、11755 にて終了した。

参考文献 (1) 成岡昌夫: 傾角度法による一方向単純板の解法. 土木学会論文集第4号. 昭和24年6月.
(2) 岡本北海: 7層性ばかりに支持される単純板の解法並びに弾性率 α の値が単純板における影響について. 土木学会論文集第19号. 昭和27年4月. 北海道土木学会報告第15号. 昭和27年5月.
(3) 山崎・神本・徳田: たわみ角-端モーメント関係式による一方向単純板の解法. 昭和40年土木学会西部支部研究発表会論文.
(4) 山崎・神本・徳田: たわみ角-端モーメント関係式による一方向単純板の解法. 昭和40年土木学会西部支部研究発表会論文.